

天平の都を掘る！

— 恭仁宮とその周辺 —

【 報 告 】 1. 恭仁宮跡大極殿院の探求

— 40年以上にわたる試行錯誤 —

京都府教育庁指導部文化財保護課

古川 匠 副主査

P 1 ~ P 9

2. 恭仁宮の時代の木津川流域を探る

— 岡田国遺跡の発掘調査成果を中心に —

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

福山 博章 主任

P 10 ~ P 18

【 講 演 】 恭仁宮の造営過程とその背景

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

中尾 芳治 理事

P 19 ~ P 26

日 時：平成31年2月16日（土） 午後1時30分から午後4時30分

場 所：相楽会館 大ホール

主 催：京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

くにきゅうせきだいごくでんいん
 恭仁宮跡大極殿院の探求
 —40年以上にわたる試行錯誤—

京都府教育庁指導部文化財保護課

古川 匠

1. はじめに

奈良時代中ごろの天平12(740)年から天平16(744)年まで、^{しょうむ}聖武天皇が主な居所とした史跡恭仁宮跡は、^{こんでんえいねんしざいほう}墾田永年私財法や^{こくぶんじこんりゅう}国分寺建立の^{みことり}詔が発せられるなど、日本の歴史史上、重要な遺跡です。また、昭和48(1973)年の調査着手(現地での発掘調査着手は翌昭和49(1974)年から)以来、京都府教育委員会、木津川市(旧加茂町)教育委員会によって、毎年、発掘調査が積み重ねられ、平成30(2018)年に恭仁宮跡の発掘調査の次数は総数で99次を迎えました。

2. これまでの調査成果

長年にわたる発掘調査で、恭仁宮の実態解明は少しずつ進み、重要な成果が積み上がってきました(図1)。

恭仁宮跡は東西に約560m、南北に約750mの大きさを設計され、その周囲は高い^{どべい}土塀(築地塀)で囲まれていました。

天皇が住まいとした空間である「内裏」は、通常、区画が一つだけですが、恭仁宮には東西に並ぶ二つの区画(内裏東地区・内裏西地区)があります。内裏西地区は全て^{ほったてばしらべい}掘立柱塀(図1)で囲まれた、東西約98m、南北約128mの大きさを、中央に大型の^{ほったてばしらたてものあと}掘立柱建物跡1棟が確認されました。内裏東地区は北側が^{いたべい}板塀、残る三方が土塀(築地塀)で囲まれており、東西約109m、南北約139mの大きさを、内裏西地区より一回りほど大きく造られていることがわかっています。また、内裏東地区では中央に大型の掘立柱建物跡2棟が南北に並んだ状態で確認されました。内裏東地区と西地区は、聖武天皇と、^{げんしょう}伯母である元正^{だいじょうてんのう}太上天皇の住まいとする説があります。

宮の中心で最も重要な公的施設である大極殿院の中心には大極殿が造られました。大極殿は、高さ1m以上の大きな土壇の上に造られた、東西45m、南北20mもある大きな建物でした。北西と南西の隅に置かれていた^{そせき}礎石は、当時のまま動かされていないことが調査によって分かりました。

大極殿を取り囲む大極殿院回廊は、北西隅付近が確認されています(図2)。回廊は、築

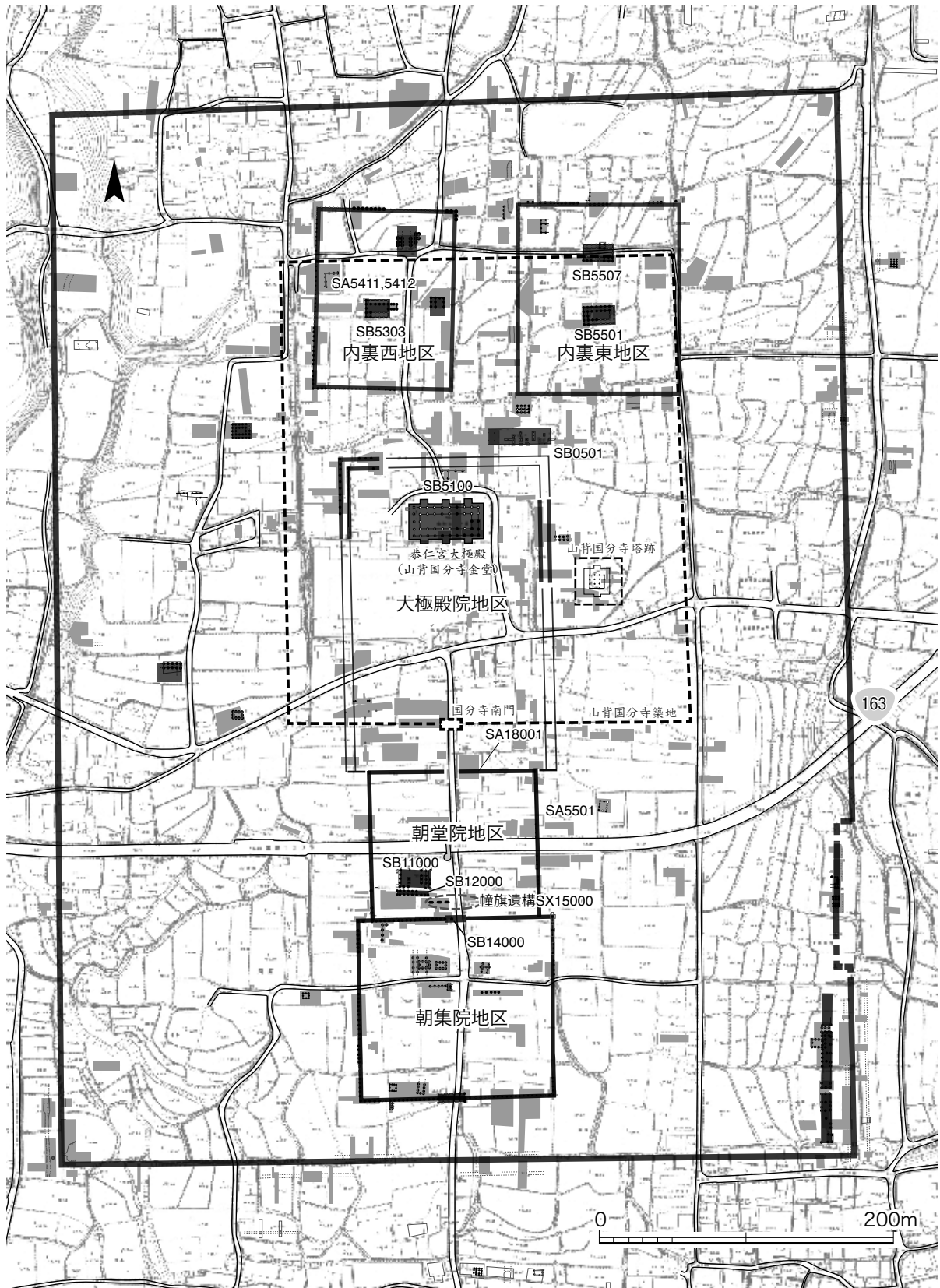


図1 恭仁宮全体図(網掛け…調査トレンチ)

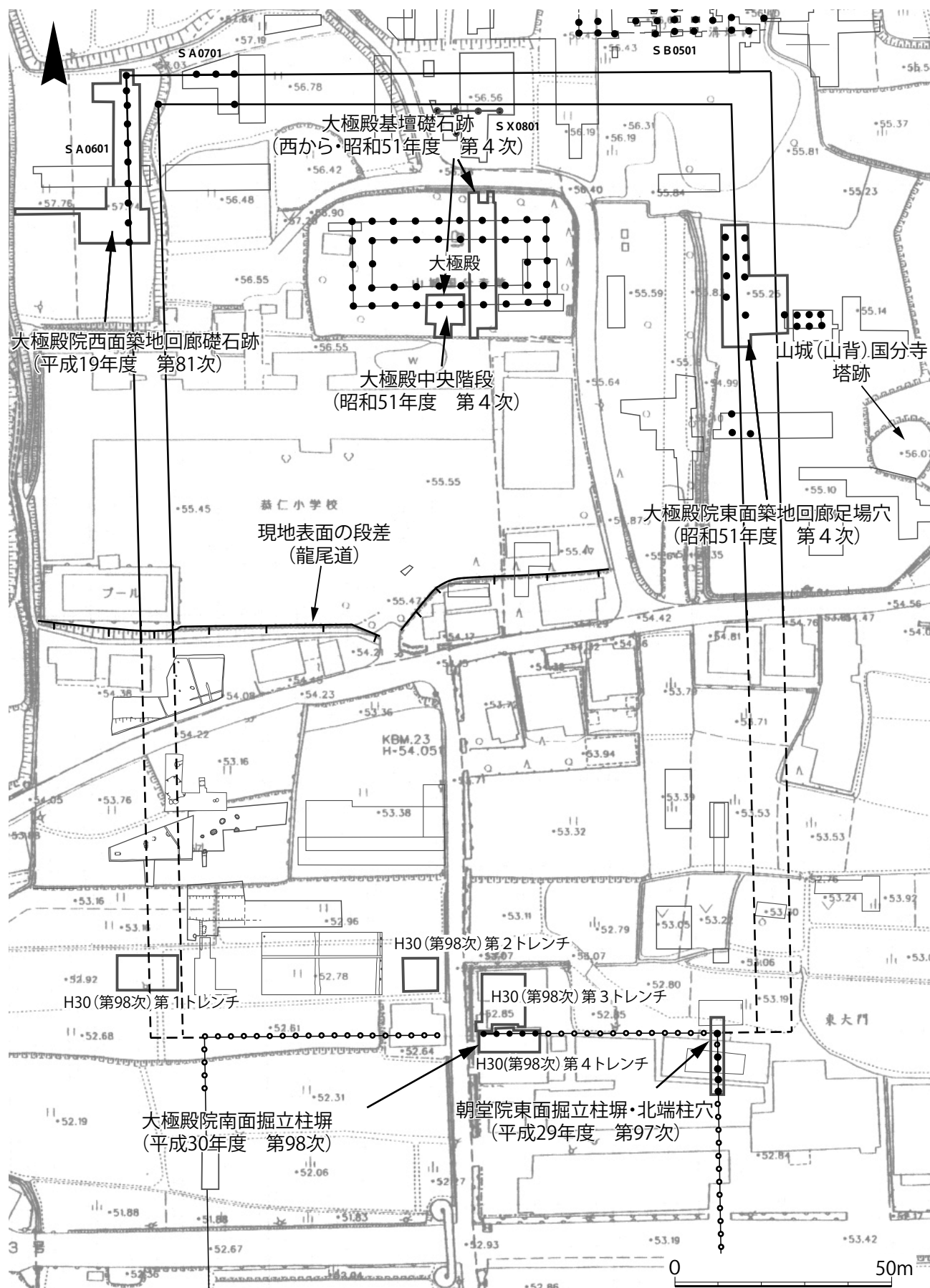


図2 恭仁宮大極殿院 全体図

地を中央に築き、その両側を通路にした「築地回廊(複廊とも・図3)」と呼ばれる立派な形式のものです。発掘調査の結果、恭仁宮の大極殿や築地回廊が、平城宮と同じ規格で造られていることが確認されました。奈良時代に関する公の歴史書である『続日本紀』には、平城宮から恭仁宮へ大極殿と築地回廊が移築されたことが記述されており、発掘調査が文献記録を裏付けることとなりました。

朝堂院・朝集院では、朝堂院の南部で、朝堂院南門、朝堂に相当する可能性がある建物が1棟、そして天平13(741)、14(742)年の元日朝賀に伴う宝幢(幢旗)遺構が見つかります。

3. 平成29年度までの大極殿院復元案(第1～3案)

長年にわたる恭仁宮の発掘調査は多くの成果を挙げてきましたが、大極殿院は、最重要施設であるにもかかわらず、内容の解明が遅れていました。

大極殿院の中心に位置する大極殿は調査が実施されましたが、大極殿を囲む大極殿院回廊の位置が判明していなかったのです。大極殿院北西隅の発掘調査から、大極殿院の東西幅は480尺(約142m)であることが確定していますが、南限が見つからず、南北の長さがわからない状態が長く続きました。

恭仁宮跡の調査が着手される4年前の昭和44(1969)年に、故・足利健亮先生(京都大学名誉教授・元京都府埋蔵文化財調査研究センター理事)が歴史地理学の手法から恭仁宮の復元案を提示されました。この際、足利先生は大極殿土壇の南にある高さ約1mの段差に注目し、この段差を大極殿院の南限と推測されました。足利先生の説はその後の発掘調査で補強され、大極殿院の南北長は360尺(約106m)で、東西にやや長い形態とされました。第1案とします(図4)。

しかし、その後の発掘調査で第1案には矛盾が生じて来ます。大極殿院の南に隣接する朝堂院の遺構が、第1案の想定位置で全く見つからなかったのです。

そして、平成23年に新たに示されたのが第2案です(図4)。第2案は、第1案よりも南に大極殿院南限を設定する案で、大極殿院の南北長は580尺とされました。やや南北に長い形態となり、第1案の南限とされた段差は、大極殿院内における段差、龍尾道の痕跡と考えられています。また、「続日本紀」の記載から、恭仁宮大極殿院回廊は平城宮大極殿院から移設されたことがわかっていますが、奈良文化財研究所による平城宮の発掘調査で、平城宮大極殿回廊は東西両面の回廊が、恭仁宮遷都の段階で解体されたことがわかりました。そして、第2案の恭仁宮大極殿院の規模は、平城宮大極殿院回廊が解体、移築された範囲と合致することが分かったのです。

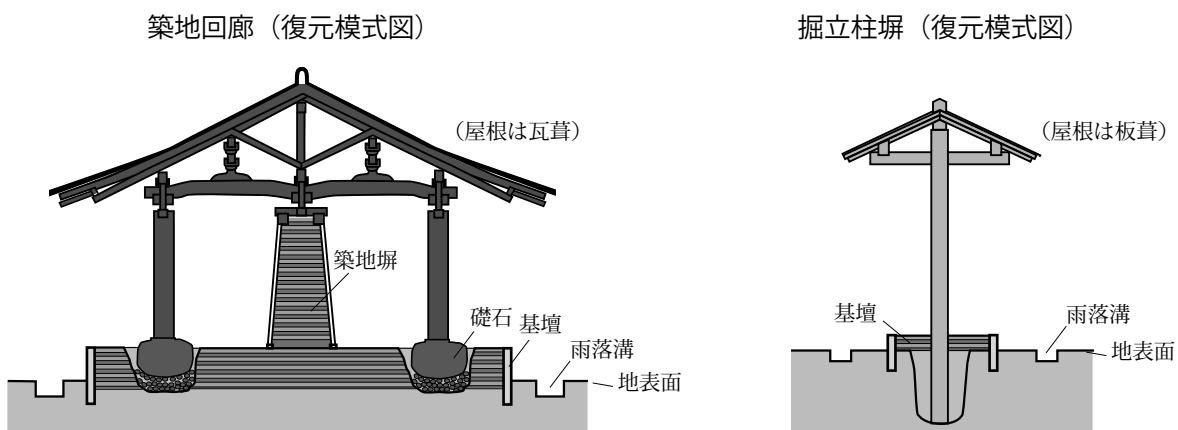
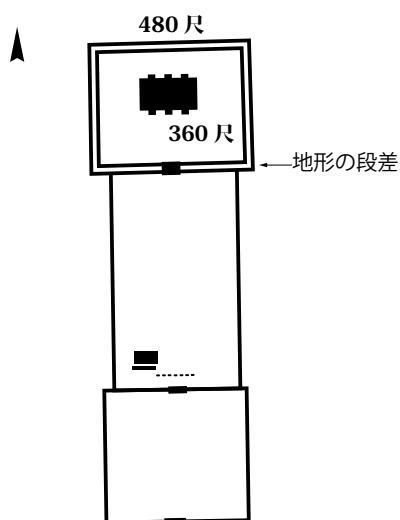
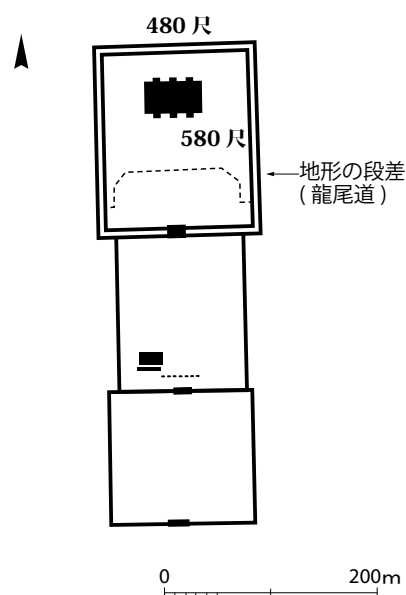


図3 築地回廊・掘立柱塼の復元模式図(断面見通し)

【第1案】



【第2案】



【第3案】

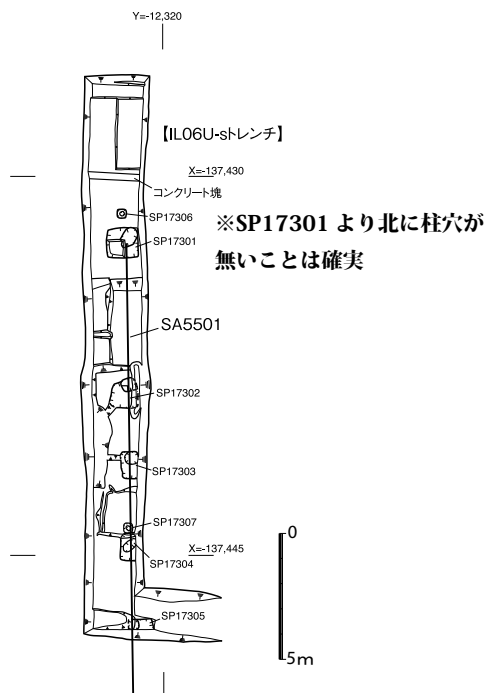
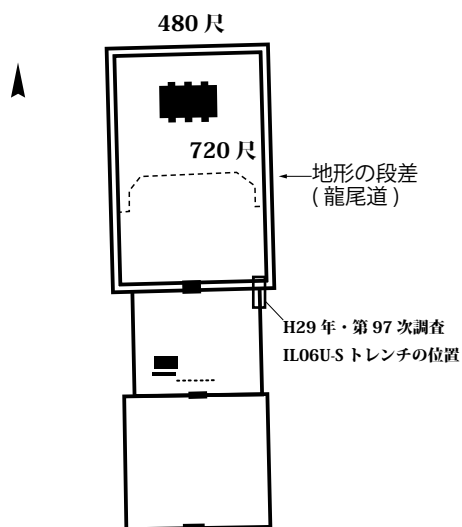


図4 恭仁宮復元案 第1～3案

しかし、第2案を検証するために実施した平成29年度の発掘調査の結果、第2案も成立する可能性は低いことがわかりました。

そして、平成29年度の調査を受けて新たに浮上したのが第3案(図4)です。大極殿院の南北長はさらに長くなり、第1案の倍の720尺となります。この案は、第1、2案とは異なり、朝堂院掘立柱塀の北端柱穴の位置を確定した上で提示したもので、これまでで最も確実な案と思われました。

4. 平成30年度の発掘調査

平成30年度の調査では、第3案を検証するため、大極殿院西面回廊南端部に第1トレンチ、大極殿院南門想定地点に第2・3トレンチを設定しました。

しかし、事前の予想に反して、第1トレンチでは整地層が確認されただけで、第2・3トレンチでも整地層と少数の遺構しか検出されませんでした。今回の調査に着手した際、高い確率でこの地点に大極殿院南面回廊と大極殿院南門があるはずと考えて調査に臨んでいたため、私は途方にくれました。

しかし、あきらめずに第3トレンチの南隣に第4トレンチを急きょ設定して調査したところ、当初の想定より約10m南の地点で、大極殿院南面区画施設と考えられる遺構が検出されました。したがって、今年度当初は確実と考えられた第3案も、結局は正しくなかったこととなります。

ただし、検出された遺構は特異なものでした。当初、大極殿院南限区画施設は築地回廊(図3)と想定していました。発掘調査から、北、西、東の三面は築地回廊であることが確定しているため、常識的に考えると南面の施設も築地回廊のはずです。しかし、遺構の形状は掘立柱塀(図3・図5)でした。

また、通常の宮跡では大極殿院南面の中央には背の高い重層門じゅうそうもんがあるはずですが、門の遺構は見つからず(図5)、大極殿院中央部で掘立柱塀が途絶えて通路状の施設となる可能性が高いことが判明しました(図6)。

5. 恭仁宮大極殿院の構造

平成30年度の発掘調査で、40年以上にわたり未解明だった恭仁宮大極殿院の規模と構造についてようやく一定の見解を提示することができるようになりました。しかし、この構造は藤原宮ふじわらきゅう、平城宮へいじょうきゅう、難波宮なにわのみや、長岡宮ながおかきゅうなどの他の宮とは大きく異なるものです。

「大極殿院」とは天皇が専有する最も重要な空間で、元日朝賀などの特定の重要儀礼が行われるとき以外は門が閉ざされています。臣下たちが入ることができるのは大極殿院の

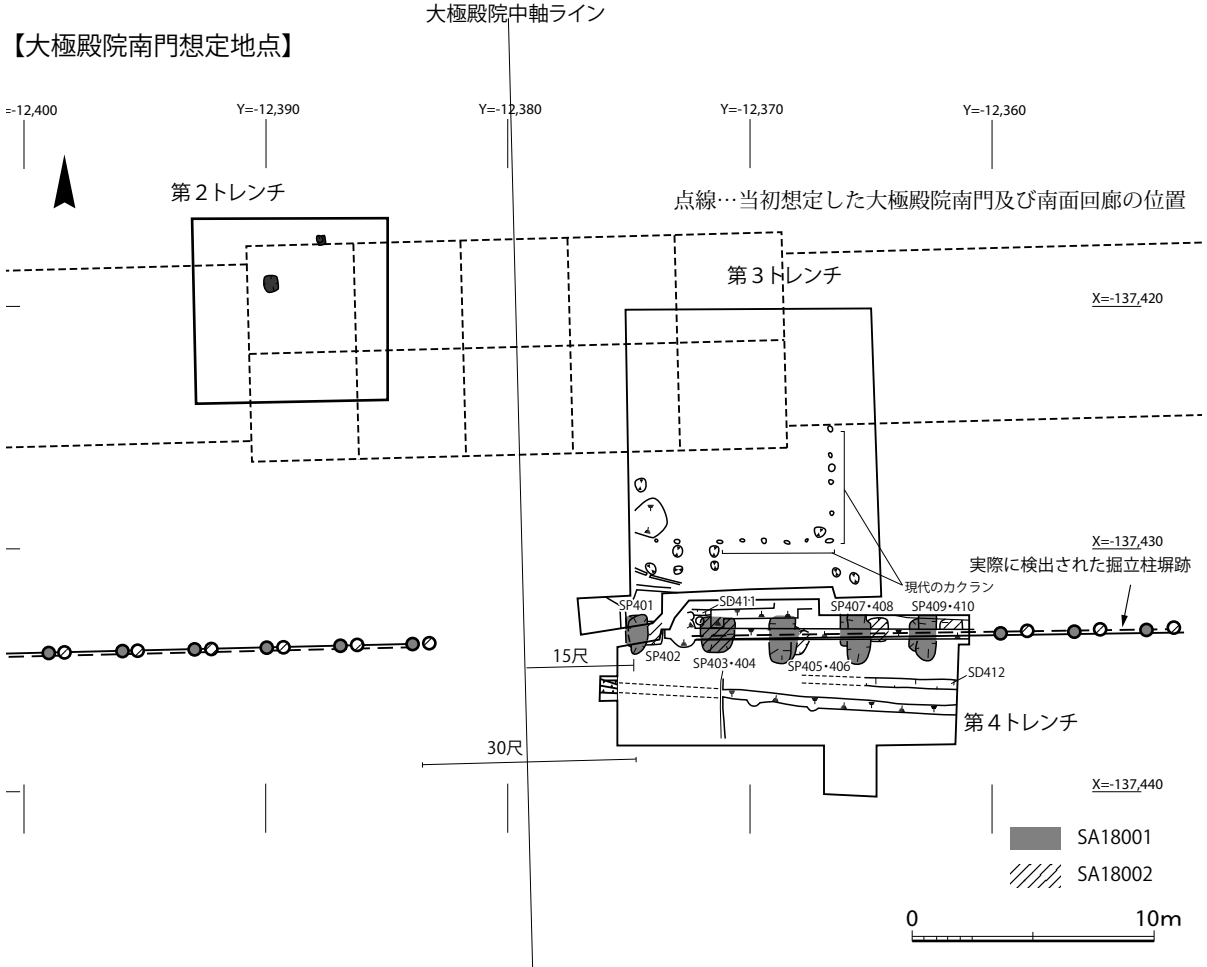
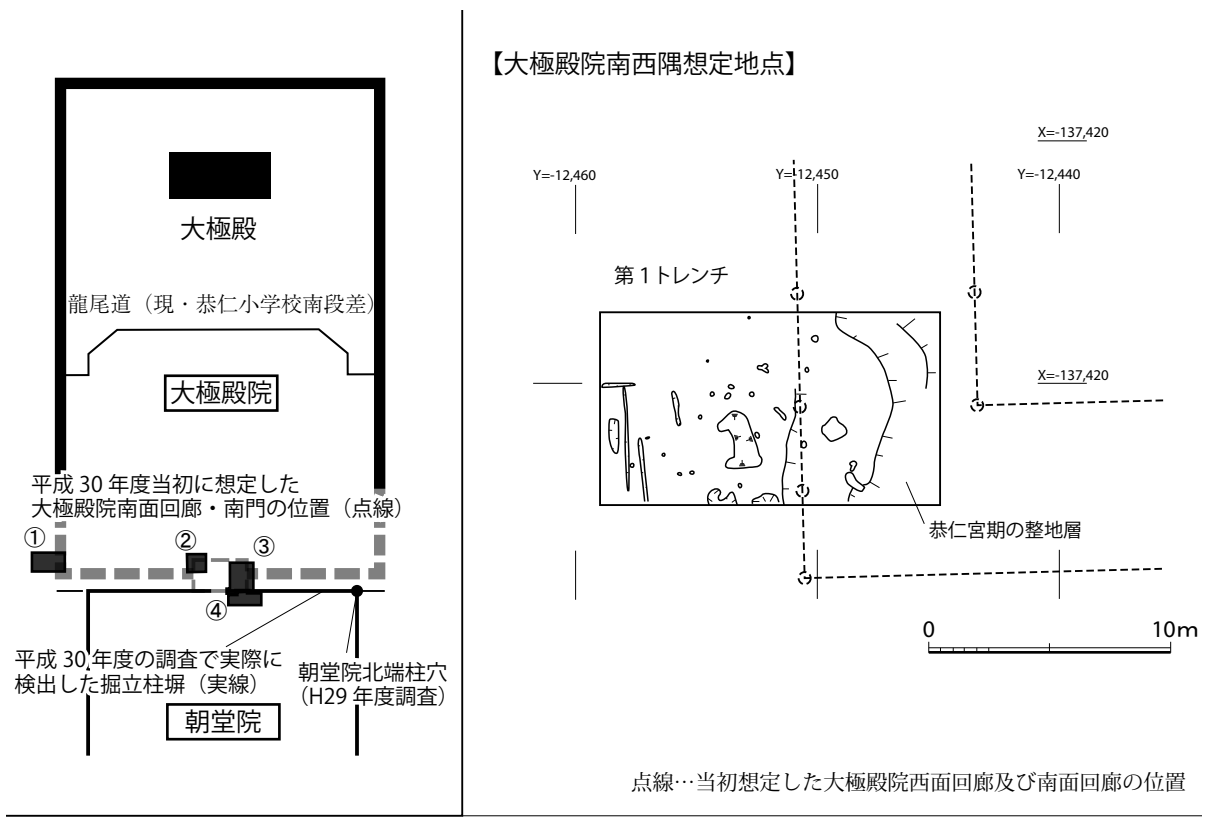


図 5 平成30年度調査トレンチ位置・平面図

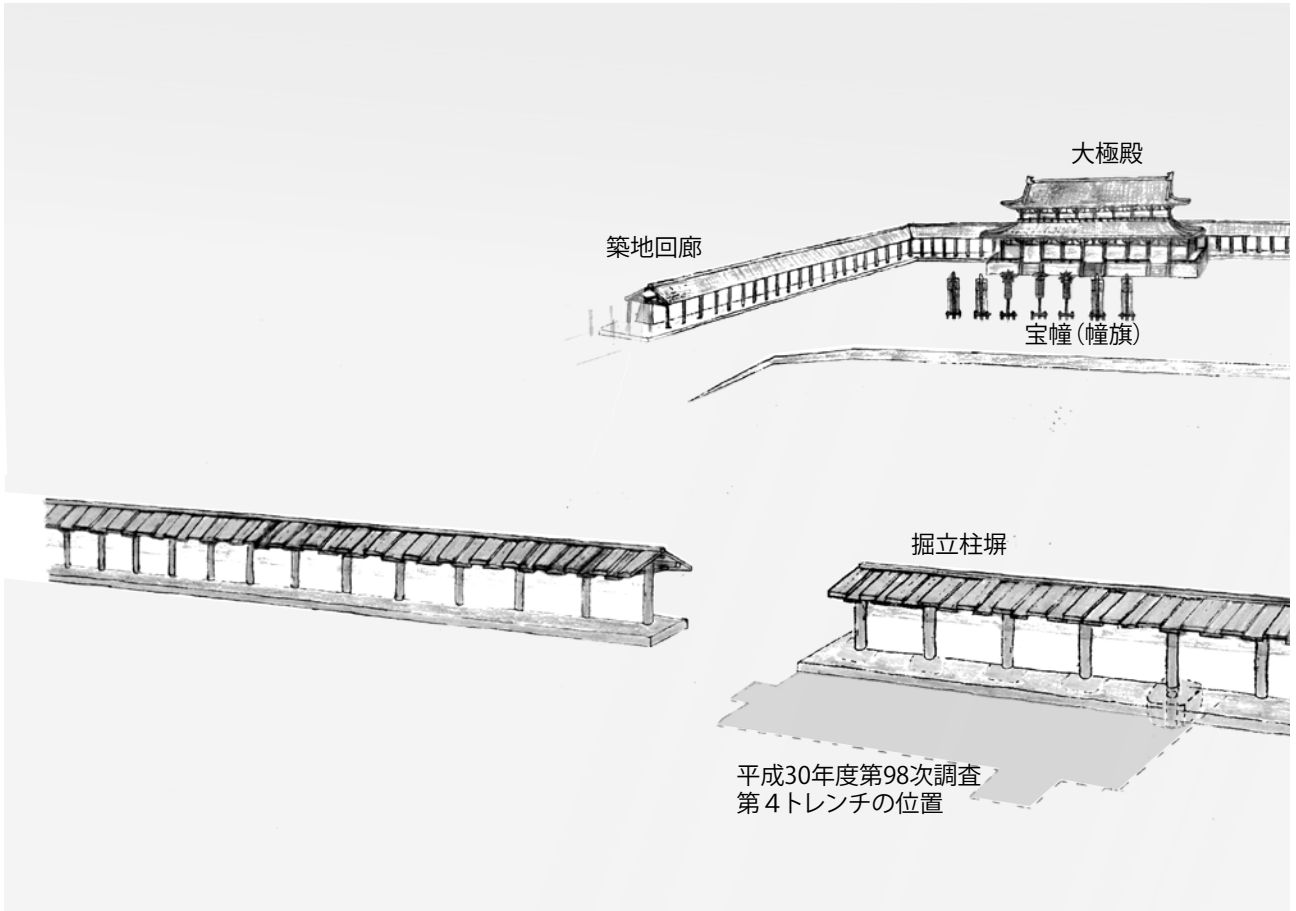


図6 恭仁宮大極殿院復元イメージ

南に隣接する朝堂院ですが、通常、朝堂院に面する大極殿院南面の回廊と大極殿院南門は、臣下に対して天皇の権力を実感させるような壮麗な施設であることが知られています。

近年、平城宮第一次大極殿院では大極殿院南門と回廊の復元整備工事が進んでいますが、大極殿院南門は礎石立で瓦葺の大型の建物と考えられています。また、京都府内では、向日市の長岡宮跡でも大極殿院南門が発掘調査されていますが、同様の構造と考えられる遺構が確認されています。

しかし、恭仁宮大極殿院は、大極殿院南面が掘立柱塀で、門も存在しないというきわめて簡素な構造である可能性が高いことが判明しました。このような構造は常識からは考えられないものです。

なぜ恭仁宮大極殿院がこのような構造なのか、今後も発掘調査で検討を進めていく必要がありますが、私は、現在、大極殿院南面以外の構造にも注目しています。恭仁宮大極殿院では北西隅付近で回廊の遺構が確認され、東面では足場穴が見つっていますが、実は他の箇所では、平成30年度第1トレンチをはじめ、遺構が全く確認されていないのです(図

2)。

私は、恭仁宮大極殿院回廊が全体的に未完成だった可能性を想定しています。大極殿院回廊の構造は築地回廊と称されるもの(図3)ですが、土を固めて^{きだん}基壇や築地塀を造る手間がかかります。瓦や木材は平城宮から輸送することで省力化が図れますが、基壇と築地塀は最初から造らなければなりません。

大極殿院を少しでも早く儀礼で使うために、通常だと非常に手間と時間のかかる大極殿院南面を、あえて簡素な掘立柱塀にしたのではないかと現段階では推測しています。

6. おわりに

平成30年度の発掘調査では大極殿院の南限の可能性の高い遺構をはじめ検出するという成果を得ることができました。しかし、なぜこのような特異な構造だったのかはまだ確定していません。今後も近隣の発掘調査を継続し、今回の想定が妥当であるかを確認し、恭仁宮の構造解明に取り組んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、今回の調査に際し、調査に参加していただいた皆さん、各方面からご指導、ご協力いただいた方々に、深く感謝いたします。

くにきゅう きづがわ 恭仁宮の時代の木津川流域を探る

おかだくに —岡田国遺跡の発掘調査成果を中心に—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

ふくやま ひろあき
福山 博章

1. はじめに

こまやま な ほととぎす いづみがは わた とほ かよ
 狛山に 鳴く 霍公鳥 泉川 渡りを遠み ここに通はず
 『万葉集』に収められた田辺福麻呂が詠んだ歌は木津川を讃えています。歌に詠まれたように、木津川は古くに「泉川」と呼ばれており、伊賀、山背、摂津、河内、近江をつなぐ水上交通路として利用されていました。

泉川の港は「泉津」と呼ばれ、奈良時代には平城京の外港として整備されました。近江や伊賀で伐採した木材をはじめ、全国各地から集まった物資の流通拠点として賑わっていたと考えられます。史料によると、平城京の官衙や寺院は必要物資を購入するために「泉津」近辺に「木屋所」などの出先機関を設置していました。泉津で陸揚げした木材は陸路で平城京へ運ばれ、宮殿や寺院の造営に使用されていました。

ちなみに、泉津で木材を陸揚げしていたことから、「泉木津」とも呼ばれていました。

また、泉津周辺には古代の道路である東山・北陸道や作り道、「賀世山西道」(『続日本紀』)などが比定されており、古来より水陸交通の要衝であったと考えられています(図1)。

今回は、岡田国遺跡を中心に木津川流域に所在する恭仁宮の時代の遺跡をみていきます。

2. 岡田国遺跡の発掘調査成果

岡田国遺跡は木津川市木津八色・馬場南に位置する遺跡です。東側には天神山丘陵と岡田国神社が所在し、南側には木津川の支流である井関川が流れています。岡田国遺跡は1977年に第1次調査が行われ、2018年までに7次に及ぶ調査が行われ、奈良時代や平安時代を中心とする遺跡であることが明らかになりました(図10・11)。

(1) 奈良時代

調査区中央部では、奈良時代中頃の直交する道路により区画された空間に方位を揃えた小規模な建物群(建物1～6)と井戸(S E152)が見つかりました。また、建物群の北側と東側では溝群が見つかりました。

①道路1・2 道路1と道路2は調査区中央部南側で直交しており、建物群や溝群を区画します。道路1の路面では荷車などの轍にぐるまと考えられる細い溝を複数検出しました。道路1は北側の調査区外まで続いており、総延長は51m以上あります。また、道路2は総延長約88mに復元できます。道路1の東側溝からは須恵器すえき、土師器はじき、瓦のほか、墨書人面土器ぼくしよじんめんどきが出土しています。道路2の南側溝は西側で道路1の東側溝に合流します。道路2の南側溝からは須恵器、土師器、瓦、埴せんが出土しました。道路1・2の道路側溝の出土遺物から奈良時代中頃と判断されます。

②建物群(建物1～6) 建物群は東西、もしくは南北方向に柱筋を揃え、北柱筋が揃っています。建物群の柱穴はおおむね隅丸方形で、柱は抜き取られていました。

建物5と建物6は重複しており、建物5は他の建物と向きが異なります。建物5の柱穴の掘形には多数の炭が含まれていたため、建物6が火災に遭った後に建物5が建てられたと想定されます。見つかった建物群は重複が少なく、建て替えの痕跡は1か所しか認められません。

建物群周辺からは圈脚円面硯けんきゃくえんめんけん、転用硯てんようけん、刀子とうす、和同開珎わどうかいちん(ほう)などが出土したことから、公的な建物群と考えられます。

③井戸S E 152 平面円形の井戸枠のない素掘りの井戸と考えられます。検出位置より建物1～6に伴う井戸と考えられます。井戸S E 152からは須恵器、土師器、瓦などのほか、須恵器の杯底部に『越後』と書かれた墨書土器ぼくしよどきが出土しました。

④溝群 建物群の北側と東側には溝群が存在し、建物群と東側の溝群は南北方向の溝S D 460で区画されていました。溝群は建物群とは平面的に重複しないことから、同時期に営まれたものと考えられます。溝群の性格については耕作溝、もしくは、水はけを良くするための排水溝と想定されます。

⑤井戸S E 540 調査区の北西側で縦板組横棧留たていたぐみよこさんどめの井戸枠を用いる方形の井戸です。井戸枠の隅柱は建築部材を転用していました。井戸枠内から、須恵器、土師器、瓦、横櫛よこぐし、刀子、獣骨が出土しました。出土遺物から奈良時代中頃の井戸と考えられます。井戸S E 540は奈良時代の建物群と離れた場所に位置することから、道路1の西側にも奈良時代の遺構が広がっていることが判明しました。また、井戸S E 540と道路1の間には同時期の遺構は確認されなかったため、空地であったと考えられます。

⑥小結 以上のように岡田国遺跡で検出した奈良時代の遺構群は、都城じょうぼうにおける条坊道路と宅地の形態に類似しています。さらに、建物群の敷地規模は平城京における16分の1町ちよう規模の宅地たくちに相当します。

奈良時代の建物群は柱が抜き取られており、道路側溝、井戸、溝群は人為的に埋め戻さ

れています。このことから、これらの施設は意図的に取り壊されたと考えられます。

なお、これらの施設は、建物の建て替えが1度しか行われていないことや出土遺物が奈良時代中頃に限定されることから、短期間しか存続していなかったと考えられます。

(2) 平安時代

調査地西側より平安時代中頃の建物群(建物8・11)と埋納遺構 S X 475を検出しました。

平安時代の建物群は奈良時代中頃の建物群と重複せず、調査区の西側に集中しています。

また、建物周辺からは緑釉陶器や灰釉陶器、転用硯、延喜通宝が出土しています。平安時代の木津地域には、南都諸大寺の木屋所や園地、荘園が所在していたと推定されており、このような施設に関連する建物群の可能性も考えられます。

3. 恭仁宮の時代の木津川流域の遺跡

恭仁宮が営まれた時代に物流拠点として繁栄した「泉津」周辺の木津川北岸と南岸には同時期の遺跡が数多く存在します。

(1) 木津川北岸

①史跡高麗寺跡 飛鳥時代に造営された南山城最古の寺院です。塔、金堂、講堂の調査が行われ、瓦積基壇が見つっています。高麗寺の補修瓦には、恭仁宮と同じ文様の瓦が使われていることから、奈良時代にも高麗寺が存続したと考えられます。また、発掘調査では未確認ですが、奈良時代には泉橋を管理していた橋寺(泉橋寺)が所在していたと考えられています。

②上狛北遺跡 高麗寺跡の北西に位置します。上狛北遺跡では100m以上の南北方向の溝と建物群が見つっています。岡田国遺跡と同様、条坊道路に類似します。須恵器、土師器、瓦、墨書土器など奈良時代中頃の遺物が数多く出土しました。特に注目されるのが、「讚岐国」と書かれた文書木簡が出土しており、遠隔地との文書のやり取りが行われていたことがわかっています。

(2) 木津川南岸

①上津遺跡 現在の木津川の堤防沿いに位置し、古代の「泉津」と推定される遺跡です。廂をもつ掘立柱建物や倉庫と考えられる建物跡などがみつっています。墨書土器、製塩土器、三彩陶器、硯、和同開珎などの銭貨、墨書人面土器や土馬などの祭祀具、役人の装身具である帯金具など、数多くの遺物が出土しており、官衙的な遺跡の様子から、「泉津」の管理施設であったと考えられています。

②八後遺跡 奈良時代から平安時代にかけての道路跡が見つっています。道路跡は、幅13.3mを測り、路面には牛や馬の足跡が見つっています。作り道推定地に位置するこ

とから、作り道の可能性も考えられます。

③^{かたやま}片山遺跡 現在のJR木津駅東側に所在する遺跡です。ほぼ正方位の掘立柱建物や溝が見つっています。出土遺物から奈良時代の中頃から後半の遺構と考えられます。掘立柱建物の1つは門の可能性も指摘されており、当時の宅地の可能性があります。

④^{かまがだに}釜ヶ谷遺跡 ^{かせやま}鹿背山の南西に所在する狭小な谷に位置する遺跡です。自然流路から墨書人面土器、^{いぐし}斎串、^{かまど}ミニチュア竈、土馬などが数多く出土したことから、川で^{さいし}祭祀を行っていたと考えられます。

⑤^{かみおでら}史跡神雄寺跡 (^{ばばみなみ}馬場南遺跡) 奈良時代前半に建立された山林寺院です。天神山の丘陵部に^{ぶつどう}仏堂、^{らいどう}礼堂、^{とう}塔跡と想定される建物が見つっており、^{そぞう}塑像、^{さいゆうさんすいとうき}彩釉山水陶器、墨書土器、^{うたもつかん}歌木簡など多様な遺物が出土しました。神雄寺の塔跡は平安時代の廃絶と考えられていることから神雄寺は奈良時代を通して存続していました。

⑥^{ならやまがよう}史跡奈良山瓦窯跡群 ^{かもちょう}旧加茂町から^{きづちょう}旧木津町、奈良市にかけて分布する窯跡群で、瓦や須恵器を生産していました。瓦は^{へいじょうきゅう}平城宮、^{ながやおうてい}長屋王邸、^{こうふくじ}興福寺、^{ほっけじ}法華寺などに供給しているため、^{かんえい}官営の^{かわらがま}瓦窯であると考えられています。窯とともに^{こうぼう}工房跡も見つっており、^{しょうにんがひら}上人ヶ平遺跡や^{おんにょがだによう}音如ヶ谷窯で検出された掘立柱建物は「^{かわらや}瓦屋」と推定されています。

4. おわりに

泉津周辺には数多くの奈良時代の遺跡が存在します。特に注目されるのは、奈良時代中頃、恭仁宮が遷都された時期に上狛北遺跡、片山遺跡、釜ヶ谷遺跡など、遺跡の数が増加することです。これは恭仁宮の遷都により、木津川の水上交通がより活発となり、泉津がさらに活況を呈していた状況とも関連すると考えられます。

このような時代背景の中で岡田国遺跡が営まれます。岡田国遺跡の発掘調査では都城に類似する道路と建物群を検出しました。これらの遺構群からは『続日本紀』に記載される恭仁京の存在が想定されます。

また、平安時代の建物群は、都が長岡京、平安京へ遷都された後も木津川流域では水運を用いた木材流通を中心とした活発な交易が続いたことを示しています。

恭仁京の存在については明確にはできていませんが、今後、恭仁宮跡周辺での調査が進めば、実像が少しずつ明らかにされるかもしれません。今回紹介した遺跡も、恭仁京を考えるうえで重要な遺跡といえるでしょう。

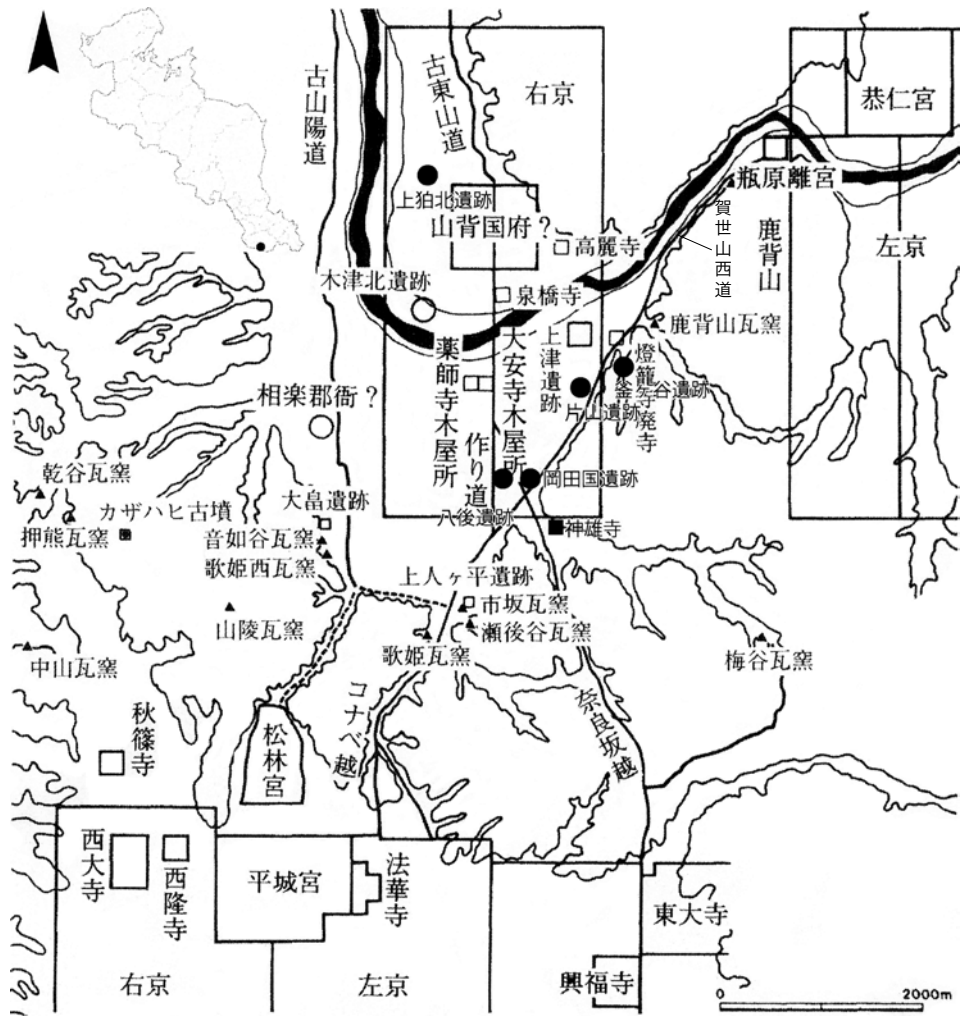


図1 泉津周辺の遺跡（『木津町史』本文篇に加筆）

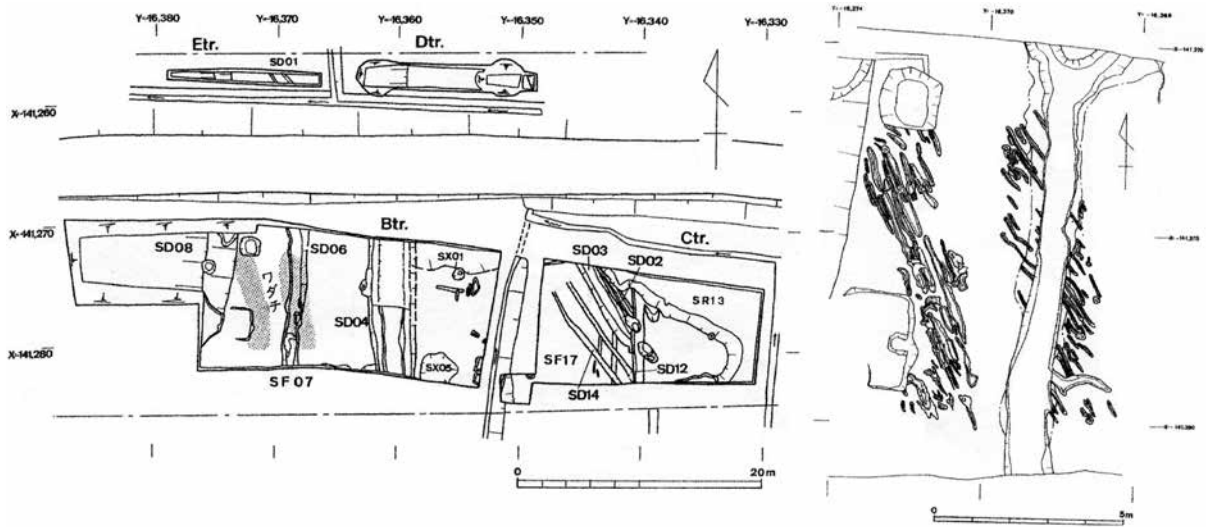


図2 八後遺跡検出遺構平面図

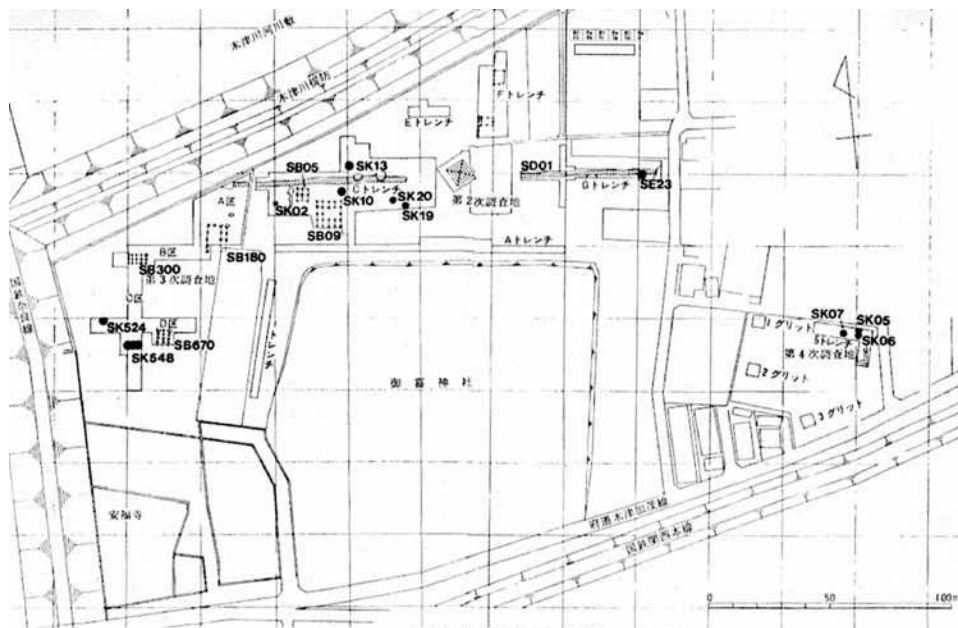


図3 上津遺跡主要遺構平面図

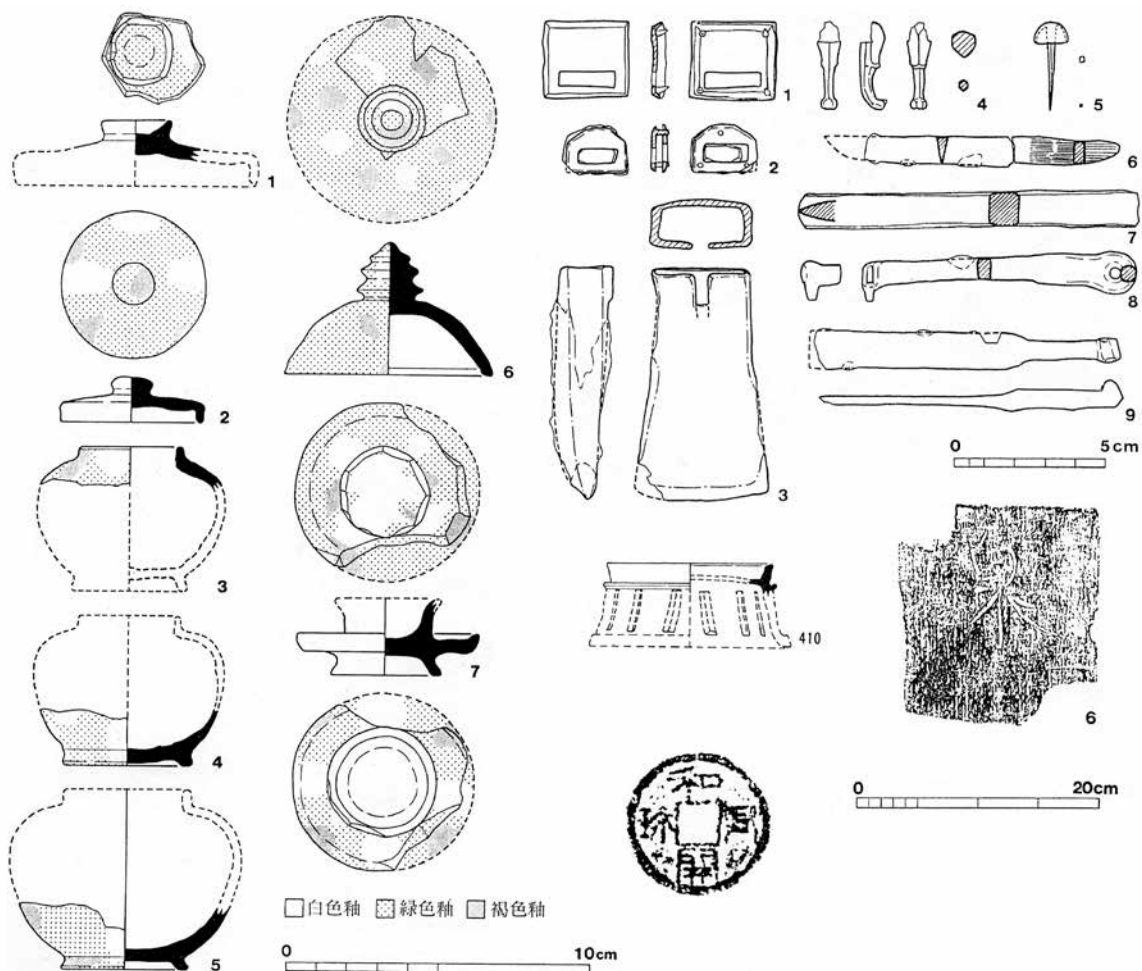


図4 上津遺跡出土遺物

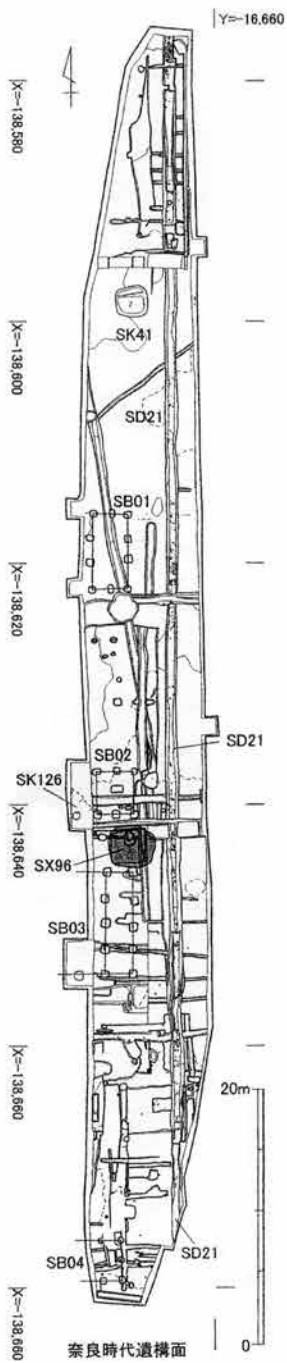


图5 上狛北遺跡検出遺構平面図

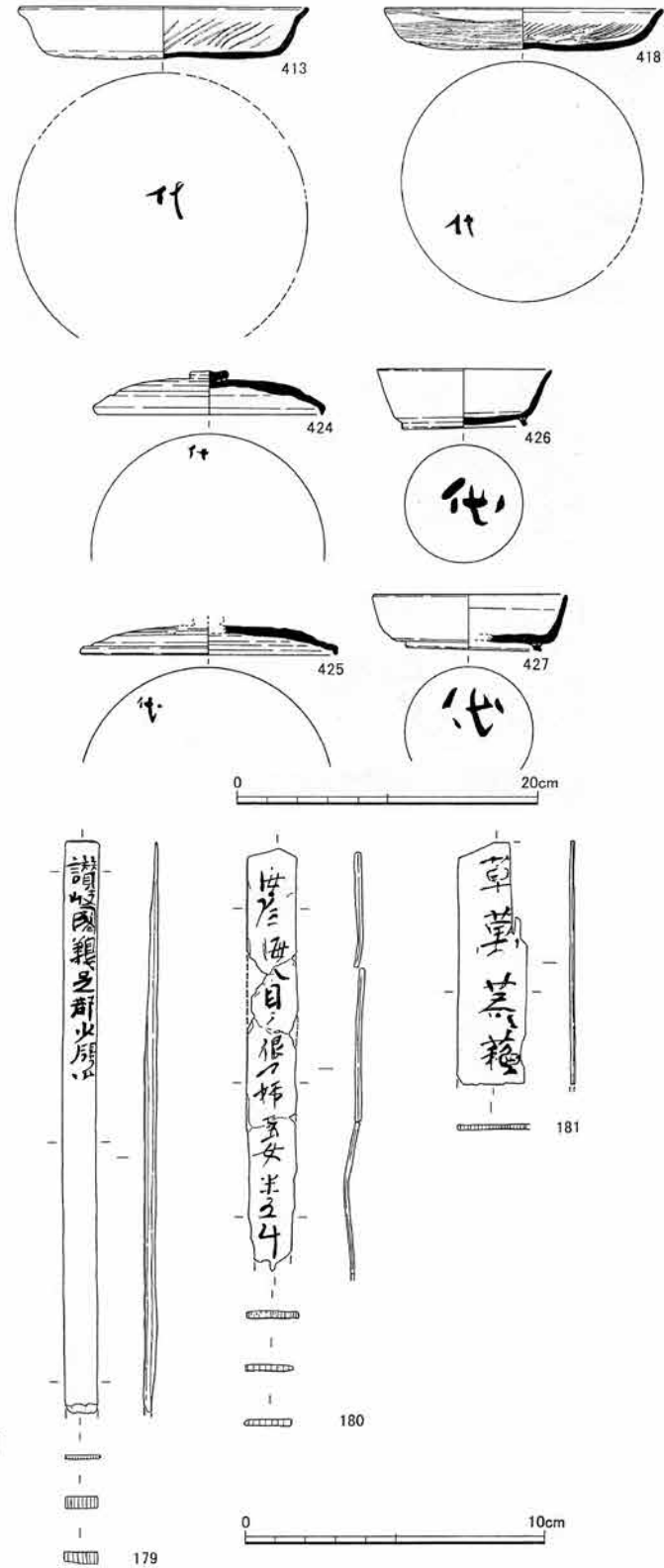


图6 上狛北遺跡出土遺物

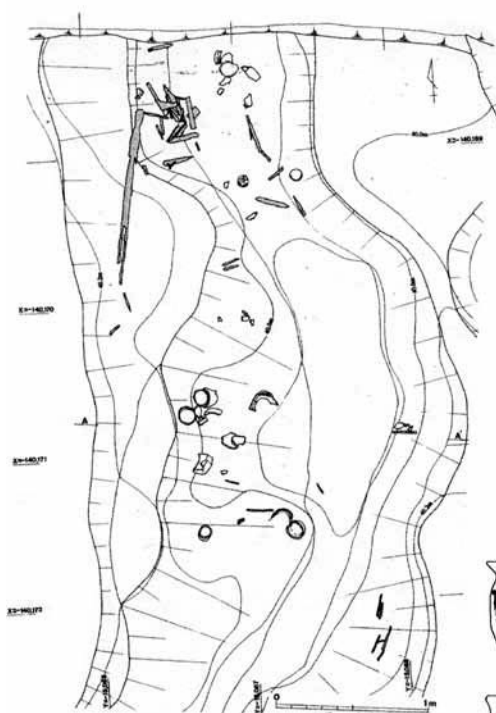


图7 釜ヶ谷遺跡自然流路(NR01)遺物出土状況図

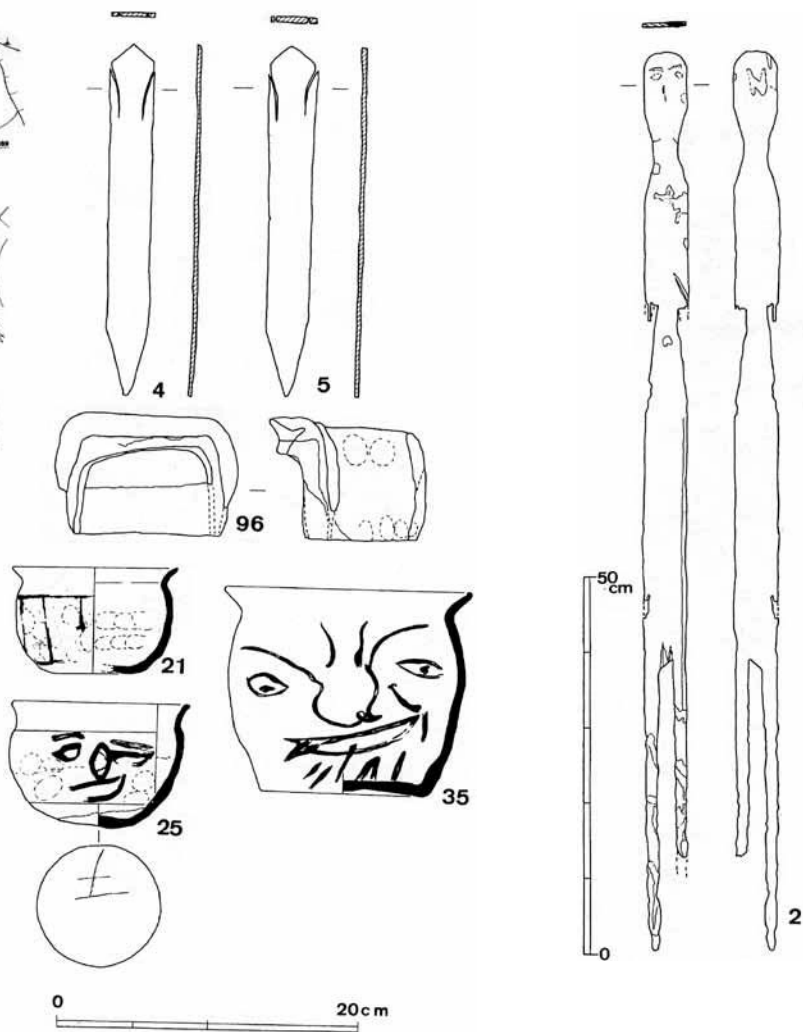


图8 釜ヶ谷遺跡出土遺物

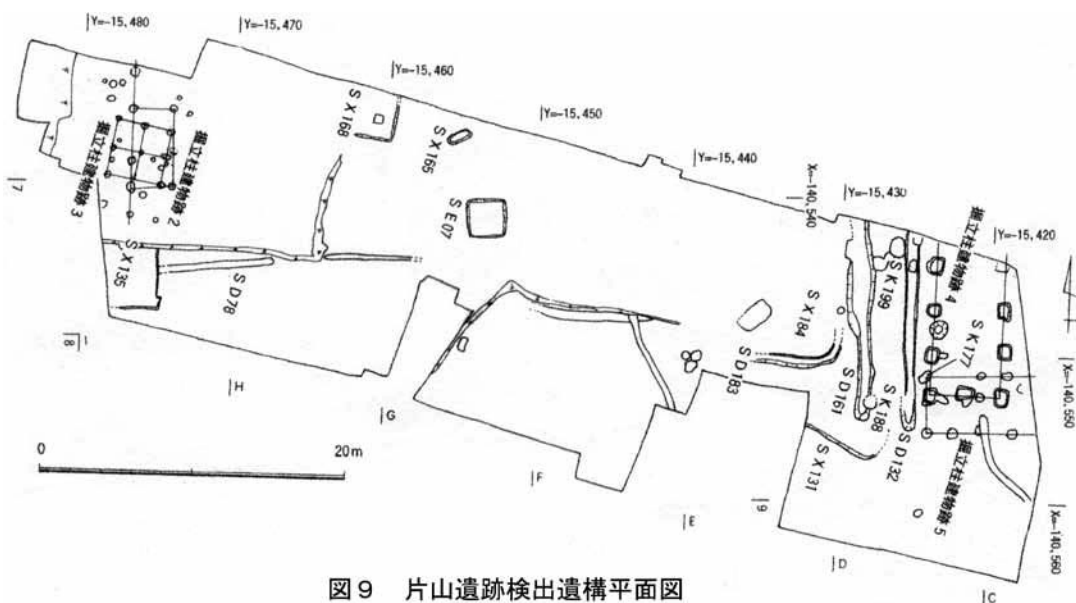


图9 片山遺跡検出遺構平面図



図10 岡田国遺跡検出遺構平面図

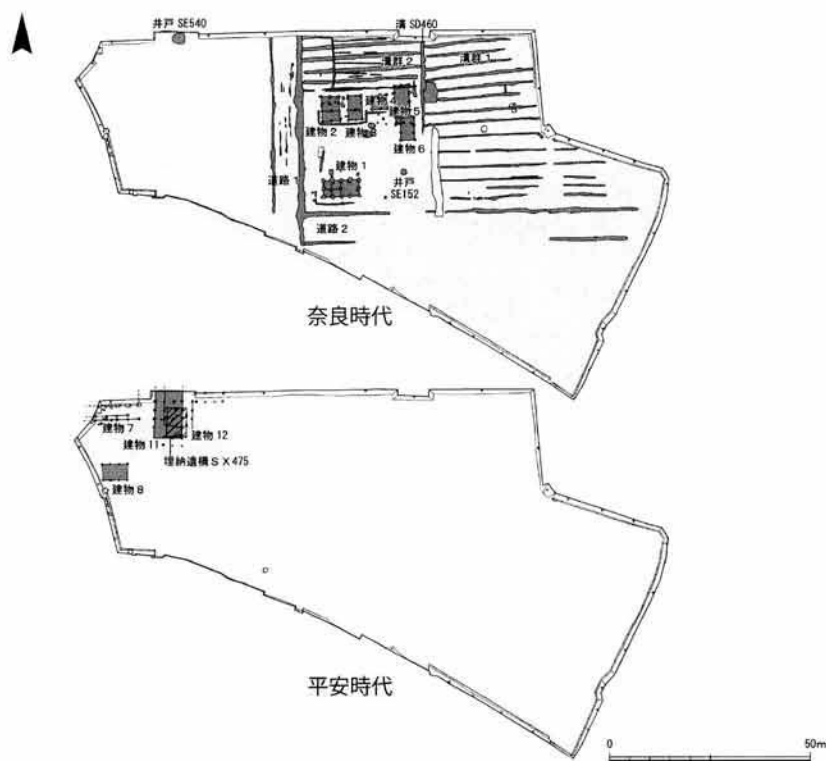


図11 岡田国遺跡検出遺構変遷図

くにきゅう ぞうえいかてい はいけい 恭仁宮の造営過程とその背景

元帝塚山学院大学教授

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事
なかお よしはる
中尾 芳治

1. くにきゅうせき 恭仁宮跡の発掘調査

京都府教育委員会による1973(昭和48)年以来45年にわたる大極殿院・内裏・朝堂院・宮大垣などの各地区の発掘調査によって、恭仁宮跡が東西約560m、南北約750mの長方形で、平城宮の約1/3の規模であることが判明(図1)。

恭仁宮の大極殿院は奈良時代前半の平城宮中央区大極殿院を移築し、朝堂院・朝集殿院も平城宮のものを移築或はモデルとして造営された。

恭仁宮は3年余「都」として機能したと考えられるが、平城宮に比してその規模・構造に大差がある。恭仁京についても上狛北遺跡や岡田国遺跡の調査例があるものの実態の解明は今後の課題である。

2. くにきょうせんと りゆう 恭仁京遷都の理由

たきかわまさじろう らくよう 滝川政次郎の洛陽モデル説(現在も有力説として残る)

聖武天皇は唐の複都制(長安・洛陽・太原)に倣い、洛陽をモデルに恭仁京を造営。洛水が洛陽城を東西に貫通 = 木津川が恭仁京を東西に貫通 = 水運・物資の輸送の便。

洛陽南1キロの伊水河畔の奉先寺大仏(龍門石窟)に倣い、恭仁京の周辺で廬舎那仏を造営するにあたり、甲賀郡の大戸川を伊水に見立てて信楽の山間部に造営地を選んだ。

- ・平城京に近接した位置、発掘調査で明らかになった恭仁宮の規模・構造や、紫香楽宮における大仏造営の放棄とともにわずか3年余で廃都になったことを考えると、複都制を目指したものとは考えにくい。
- ・天平12年末の恭仁京遷都から天平17年5月の平城京遷都までの聖武天皇の足跡をたどると、紫香楽宮に大仏を造営することが大きな目的であって、恭仁宮の造営は木津川水運の泉津の機能を活かしてその基地をつくることであつたのではなかろうか。

3. 聖武天皇の仏教信仰

聖武天皇の生い立ち

安宿媛(光明皇后)と同年、幼なじみ。37歳まで、母(藤原宮子)の顔を知らず。

7歳で父(文武天皇)と死別。皇太子(基王)を1歳で亡くす。

天皇としての苦悩

長屋王の変 = 天平元年(729)2月、左大臣として太政官の最高地位にある皇族で、皇族以外からの立后に異義を唱える可能性のある長屋王を下級役人の密告により謀反の罪で自殺させた(藤原武智麻呂らによる謀殺)。長屋王の死後、光明立后。

長屋王の変後、落雷・旱魃・疫病・地震など自然災害が連年起こり、「それらの災害は朕の不徳の致すところであり、その責任はすべて朕一人にある」と詔。

天平9年の天然痘大流行と藤原4兄弟の死去。(長屋王の呪い?)

当時の総人口450万人の内、100万~150万人が死亡と推測されている。

天平9年12月、聖武天皇は玄昉僧正の看護を受けた母宮子に皇后宮で37年ぶりに対面。

(中宮亮吉備真備・玄昉・光明皇后・橘諸兄が側近として聖武の仏教による鎮護国家政策に献策・支援)

仏教(金光明最勝王経)による鎮護国家

天平9年以来、天下太平・国土安寧のため経典書写や金光明最勝王経を転読

天平12年、難波宮行幸時、皇后と河内知識寺で廬舎那仏を拝し、大仏造頭を思い立つ。

天平13年、恭仁宮の造営を急ぐ。国分寺造営の詔。

天平14年、恭仁京の東北道を開く。造宮卿智努王らを造(紫香楽)離宮司に任命。

9・12月、紫香楽宮行幸。

天平15年、大仏造頭の詔。甲賀寺の寺地を開く、行基の協力。

4・7月、紫香楽宮行幸、

天平16年、紫香楽宮行幸、廬舎那仏の体骨柱を建てる。(紫香楽宮での大仏造頭挫折)

(天平勝宝4年、聖武太上天皇、光明皇太后・孝謙天皇、東大寺で大仏開眼会)

4. 国分寺・大仏造頭への光明皇后の協力

「東大寺及び天下の国分寺を創建するは、もと太后(皇后)の勧むるところなり」

(『続日本紀』天平宝字4年6月、光明皇后崩伝)

光明皇后は仏教に篤く帰依し、東大寺、国分寺の設立を聖武天皇に進言した。

また貧しい人に施しをするための「悲田院」、医療施設の「施薬院」を設置して慈善を行った。聖武の死後49日に遺品を東大寺に寄進(正倉院宝物)。

光明皇后と則天武后

光明皇后(皇太后)は政治をとるに際し、同じ女性の身で大唐帝国を統治した則天武后 [在位690~705年]に範をとることが多かった。大宝元年(701)の遣唐使粟田真人は長安大明宮麟徳殿で則天武后から宴を賜っている。歴代の遣唐使や聖武天皇の側近であった玄昉・吉備真備からも則天武后に関する情報が得られたと思う。

国分寺の制 = 唐の大雲寺の制「天授元年(690)7月、天下に『大雲経』を頒ち、10月には各州ごとに大雲光明寺を置いて千人の僧を得度した」

(『新唐書』本紀卷4、則天武后の治世 = 持統4年)

洛陽龍門奉先寺の盧舎那仏 = 則天武后が化粧料を寄進、像高6メートルの大仏)

官号の改称 = 太政官 → 乾政官、太政大臣・左右大臣 → 大師・大傳・大保など

1年2度の改元(天平21年 → 天平感宝元年 → 天平勝宝元年)

4字の年号(天平感宝・天平神護・神護景雲 = 天冊万歳・万歳登封・万歳通天)

5. 恭仁京造営の背景

(1) 恭仁京の地は木津川、鹿背山を望む景勝地で、早く岡田離宮・甕原離宮が営まれ、橘諸兄の相楽別業もあって、聖武天皇は度々行幸されており、周知の地であった。

(2) 恭仁京遷都は、事前に諮られることなく聖武天皇の東国行幸の途次、「遷都に擬して」橘諸兄を恭仁宮に先発させた後、天平12年12月15日に恭仁宮に行幸し、「始めて京都の造営を行わせた」。東国行幸が恭仁京遷都を意図していたものであれば、木津頓宮跡とみられる膳所城下町遺跡の例から見て天平12年10月29日の行幸出発よりかなり早い段階(榮原説では天平12年4~5月ごろ)に恭仁京遷都の方針が決まっていたのではないか。

(3) 天平13年正月11日、伊勢神宮と七道の諸神社に使者を派遣して恭仁京遷都を報告。ようやく恭仁京遷都が周知されたのである。以後の聖武天皇の足跡(年表)をたどると、恭仁京遷都は、仏教による鎮護国家を目指して紫香樂大仏を造営しようとした前提条件として企図されたものであったのではないか。

そうした路線に反対する勢力もあった = 藤原広嗣の乱、元正太上天皇など。

(4) 天平16年正月、「恭仁・難波二京のいずれを都とするか」諮問から考えると、王権の所在地としての要件(天皇、内外印、馱鈴、高御座、大楯・鉾、器仗など)を満たしたものが「都」で在り、「都」は平城京から恭仁京、難波京、紫香樂宮(新京)と変遷し、平城京へ還都した。大仏造立の目的が失われた恭仁京・紫香樂宮は廃絶、難波京は外交・経済の要地として存続した。

恭仁京は唐の複都制をモデルにしたものといえるか疑問。

(5)なぜ聖武天皇は恭仁京東北の紫香樂に大仏を造ろうとしたのか。

- ・ 恭仁京の東北30kmの大戸川畔の大仏造営は、洛陽城の約12km南の伊水河畔に位置し、則天武后が化粧料を寄進して造立した奉先寺廬舎那仏を模した。(瀧川政次郎、おがさわらよしひこ小笠原好彦)
- ・ 洛陽の南に位置する奉先寺大仏を模した大仏の位置が、恭仁京東北の紫香樂宮になったのは、大仏造立に不可欠な「資材と燃料」の確保のため。(小笠原好彦)
- ・ 廬舎那仏の造立を意図した聖武天皇の手にした「日本図」では「紫香樂村」が「日本」の中心に位置していた。(黒崎直くろさきただし)

【参考文献】

- 遠山美津男 『彷徨の王権聖武天皇』 角川選書 1999年
- 瀧波 貞子 『帝王聖武』 講談社選書メチエ 2000年
- 仁藤 敦史 『都はなぜ移るのか—遷都の古代史』 吉川弘文館 2011年
- 吉川 真司 『聖武天皇と仏都平城京』 講談社 2011
- 伊野 近富 「恭仁京造営史(上・下)」『京都府埋蔵文化財情報』 115・116号 2011・2012年
- 小笠原好彦 『聖武天皇が造った都—難波宮・恭仁宮・紫香樂宮』 吉川弘文館 2012年
- 栄原永遠男 『聖武天皇と紫香樂宮』 敬文社 2014年
- 林 陸朗 『光明皇后』 人物叢書、吉川弘文館(新装版 2004年) 1961年
- 井上 薫 「光明皇后と則天武后」『奈良朝仏教史の研究』 吉川弘文館 1966年
- 黒崎 直 「紫香樂大仏の造立をめぐる一つの憶測—なぜ紫香樂に大仏が造立されようとしたのか—」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』 2007年
- 原 百代 『武則天』 毎日新聞社私家版全5巻・1978年—新装版全3巻、講談社文庫全8巻

聖武天皇の仏教政策

天平 三年 九月

聖武天皇、『雑集』（中国の仏教関係の文章を寄せ集めたもの）の書写。（人々が喜捨を募って共同で仏像や寺院を建設するための讚や願文が多数収録）

天平七・九年

疫病大流行。仏教への傾倒を深める。

天平 九年三月

諸国に釈迦三尊像を造頭氏、大般若経一部六百巻の書写を命ずる。

天平一二年 二月

河内知識寺で廬舎那仏を拝し、大仏造頭を思い立つ。年末、恭仁京遷都。

天平一三年 二月

国分寺建立の詔。

天平一四年 二月

恭仁京の東北道を開く。

八月

造（紫香楽）離宮司任命。

天平一五年一〇月

大仏造頭の詔。

「仏法によって天下に幸をもたらしたく、朕は菩薩の大願を発して、廬舎那仏の金銅像を造り奉る。国の銅を尽くして鑄造し、大山を削って堂を構えるが、その際には人民をあまねく、「朕が知識」とし、ともに利益を蒙り、悟りに至るようにしたい。朕の力だけでも成就しようが、それでは形だけのものになる。ついては、知識に加わる者たちよ、ぜひとも至誠を発し、思いを込めて協力してほしい。

始めて（甲賀寺）の寺地を開いた。行基は弟子たちを率いて、多くの民衆を仏像の建立に勧め誘った。

東国行幸と藤原広嗣の乱・恭仁京遷都

天平一二年 三月二三日 天皇・元正太上天皇、甕原離宮に行幸。
 天平一二年 五月一〇日 天皇、右大臣橘諸兄の相楽別荘に行幸。
 天平一二年 八月二八日 藤原広嗣、時の政治を批判する上表文提出し、
 玄昉・吉備真備を糾弾。

九月 三日 広嗣挙兵。

大野朝臣東人を大將軍に任じ、広嗣追討。

一〇月 九日 大野東人、板櫃川の戦いで勝利し広嗣逃亡を報告。

一〇月一九日 「造伊勢国行宮司」を任命。

一〇月二三日 「前後次第司・騎兵大將軍」を任命。

一〇月二六日 大將軍大野東人への勅。

「朕は思うところがあるので、今月の末よりしばらくの間、関東に往こうと思う。行幸に適した時期ではないが、事態が重大でやむを得ない。
 將軍らはこのことを知っても、怪しんだりしないようにせよ」

一〇月二九日 行幸出発。広嗣逮捕が報告される。

十一月 二日 河口頓宮到着。

五か 広嗣処刑の報告。

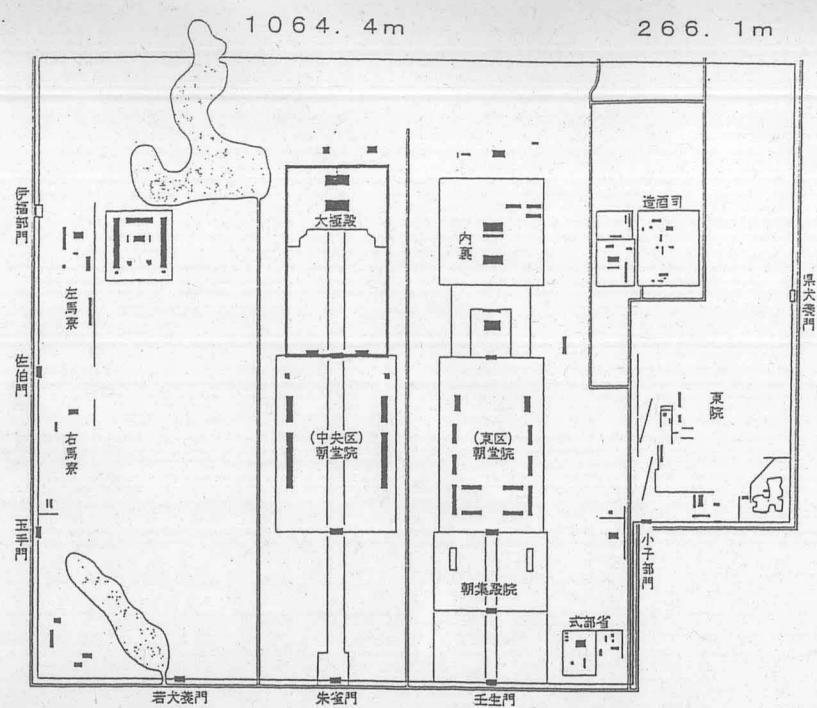
一二日 川口頓宮出発。

十二月 六日 恭仁郷の地を整備して遷都の候補地にするために

(遷都を擬するために)橘諸兄、横川頓宮を先発。

十二月 十五日 天皇、先発して恭仁宮に行幸し、「始めて京都を作

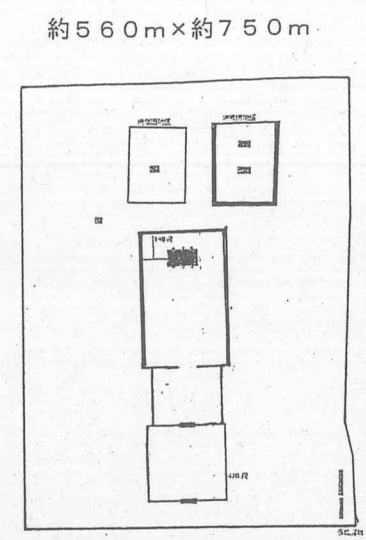
る」。太上天皇と皇后は遅れて到着した。



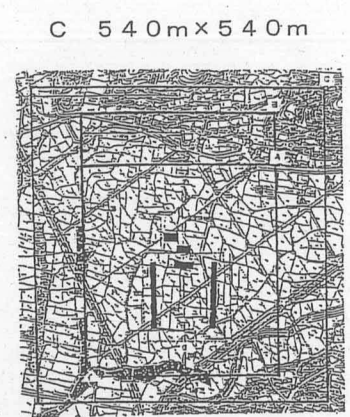
1 平城宮 (奈良時代前半)



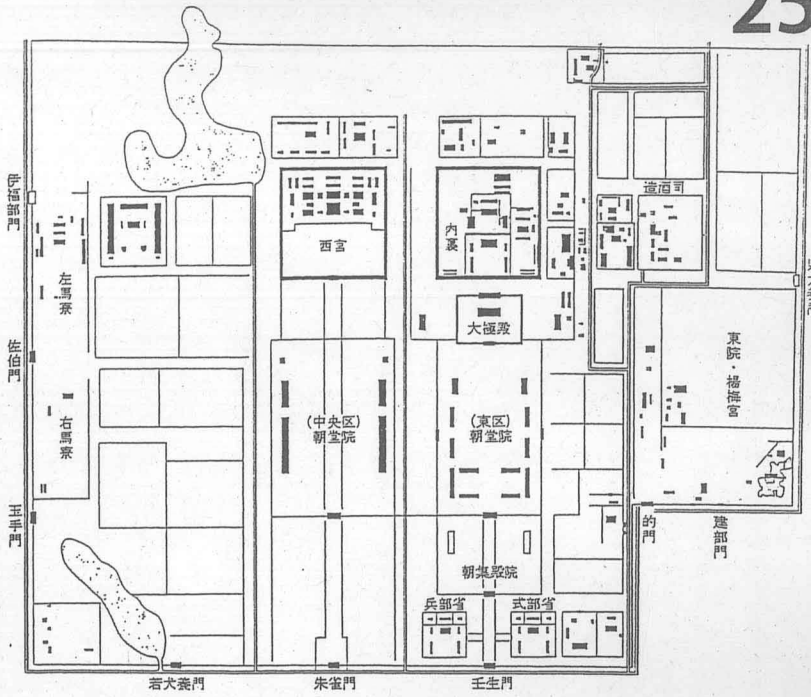
2 後期難波宮



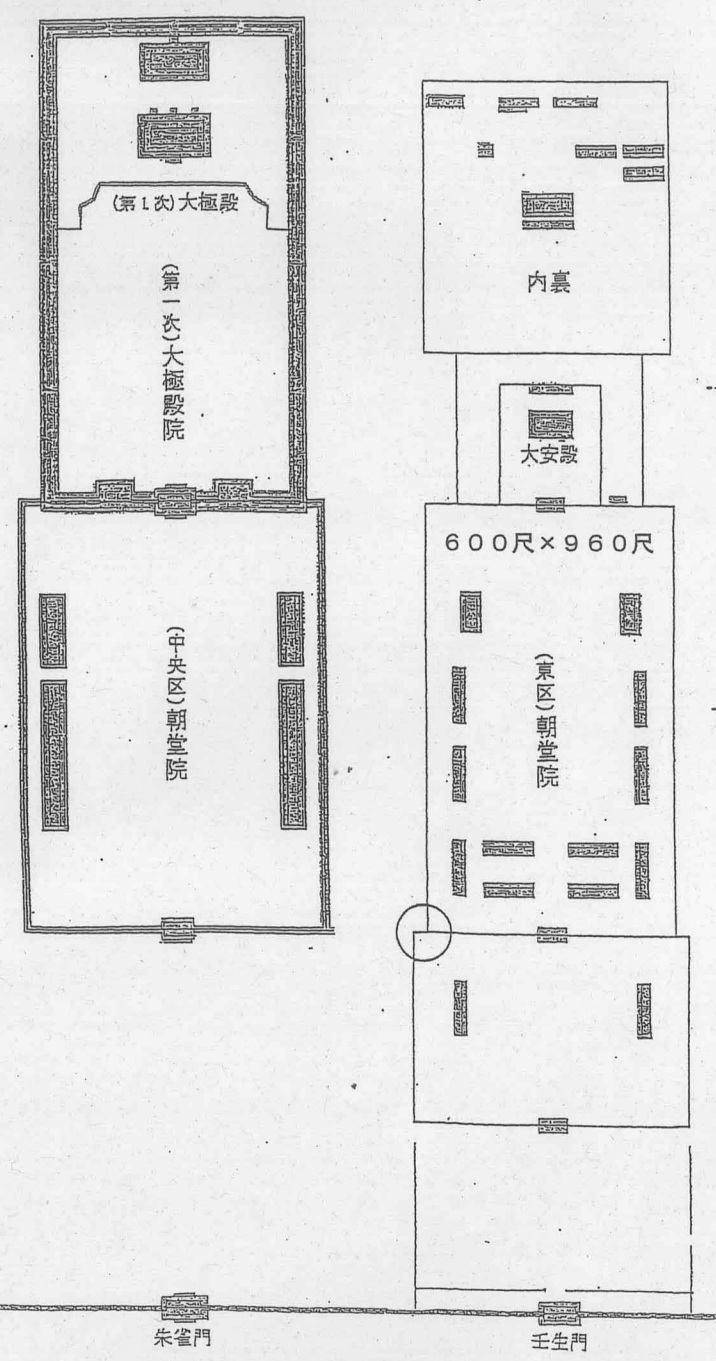
3 恭仁宮



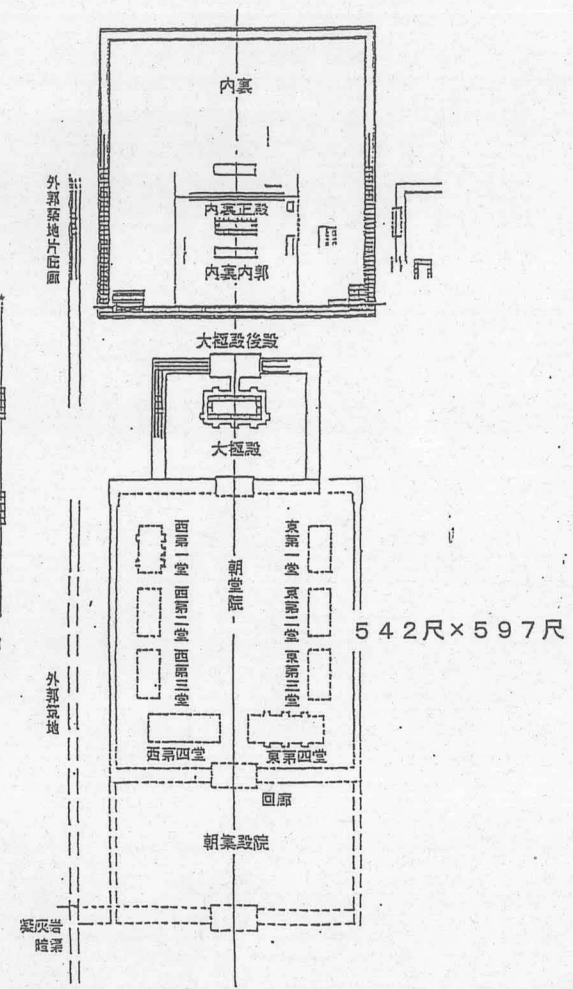
4 紫香樂宮



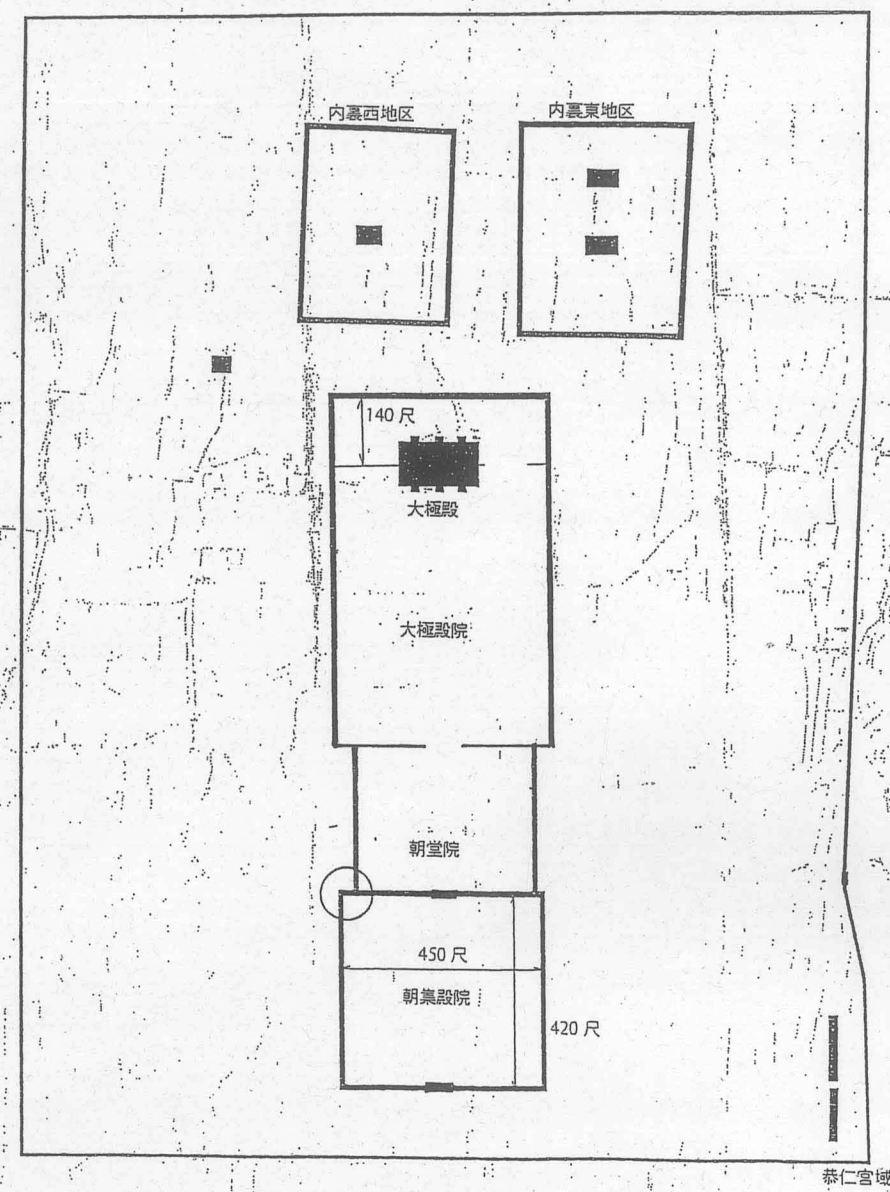
5 平城宮 (奈良時代後半)



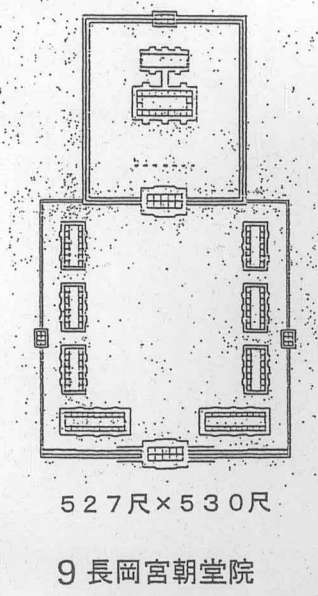
6 平城宮中枢部 (奈良時代前半)



7 後期難波宮中枢部



8 恭仁宮中枢部



9 長岡宮朝堂院

図1 前期平城宮・後期難波宮・恭仁宮・紫香樂宮・後期平城宮の規模・構造比較図

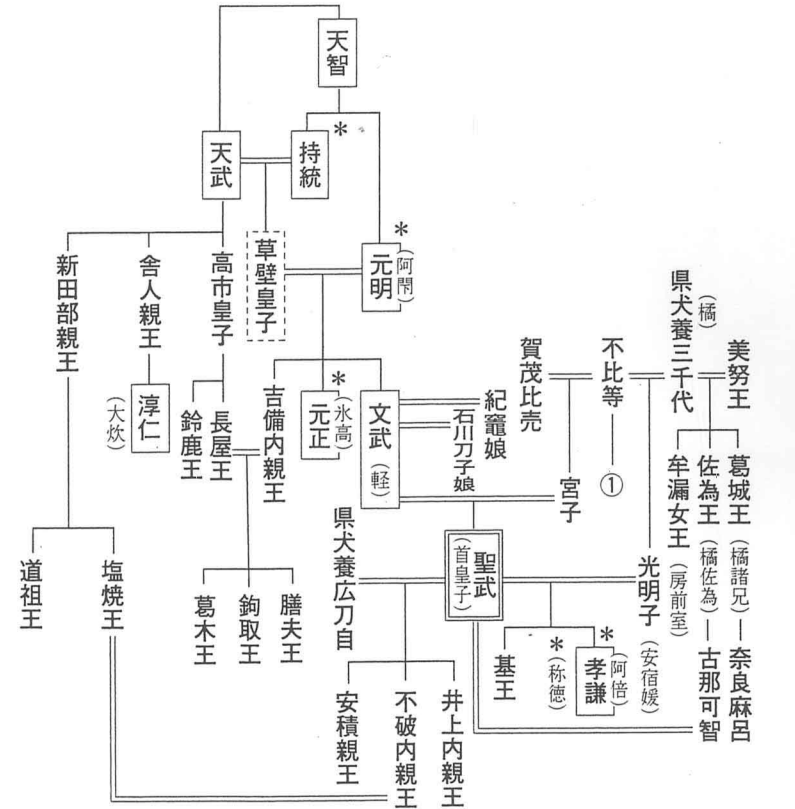
	天平12年 (740)	天平13年 (741)	天平14年 (742)	天平15年 (743)	天平16年 (744)	天平17年 (745)
平城宮・一般的事項	2/7 2/19 5/10 5/12 10/19 10/23 10/26 10/29 ⑤鈴鹿王・藤原豊成 右大臣諸兄の相樂別業 伊勢國に行幸 東国行幸の勅 次弟司任命 造伊勢行宮司任命 12/15 ⑤鈴鹿王・藤原豊成	③/9 (兵部) 3/14 葦原宮 7/10 太上天皇新宮にうつる 9/30 藤原豊成 宇治・山科 10/2 大養徳恭仁大宮と称す 11/21 大養徳恭仁大宮と称す	1/5 大宰府を廢す 2/1 2/5 皇后宮に幸す 4/20 皇后宮に御す 8/11 8/27 造離宮司任命 9/4 鈴鹿王・紀飯麻呂 ⑤巨勢奈弓麻呂 12/29 紀飯麻呂 藤原仲麻呂 鈴鹿王 巨勢奈弓麻呂	1/1 1/3 橘諸兄・紀飯麻呂 巨勢奈弓麻呂 4/16 橘諸兄・紀飯麻呂 巨勢奈弓麻呂 7/26 巨勢奈弓麻呂 鈴鹿王 橘諸兄・鈴鹿王 9/21 寺地を開く 東海東山北陸三道三國の調庸を紫香樂宮に貢らしむ 大仏造頭の詔 甲賀郡の調庸、畿内に准す	12/24 12/26 鎮西府をおく (器仗) 11/2 市人に問う 安積親王患死 百宮に恭仁・難波を問う 表東次弟司任命 難波行幸のため 恭仁宮の造作停止 1/15 ①/1 ①/4 ①/11 (高御座・大権器仗) (歌・鈴・内外印) 2/20 藤原仲麻呂 小田王 鈴鹿王 3/14 諸司に公願錢をわかつ 大極殿で大般若經を転読する (三嶋路) 4/23 護舍那仏の体骨柱をたてる 11/13 11/17 元正太上天皇 智努離宮・仁岐河 珍努竹原井離宮 1/1 1/7 諸司宮人僧に京を開く 宮城の東山に火 寺の東山に火 市の西山に火 大安殿に御す 新京と称す。大権槍をたてる	5/6 6/4 6/5 6/14 8/28 9/26 11/2 12/15 ⑤藤原豊成 巨勢奈弓麻呂 宮門に大権をたてる 大宰府を復す 伊勢大神宮に幣帛を奉る 5/6 ⑤紀飯麻呂 9/5 枕席不安 (天皇重病) 橘奈良麻呂 摂津大夫に任命
恭仁京		国分寺建立の詔				
紫香樂宮						
難波宮						

※太線は聖武天皇の所在、
⑤は留守司、丸印の月は閏月を表わす

榮原永遠男『今よみがえる紫香樂宮』1994年

恭仁京遷都・大仏造頭関係年表

天平元年 (七二九)	二月	長屋王の變。光明立后。聖武天皇即位。
天平九年 (七三七)	正月	阿倍親王 (後の孝謙・称徳天皇) 立太子。疫瘡 (天然痘) 大流行、藤原四兄弟死去。(長屋王の變後、連年の天変地異)
天平十一年 (七三九)	三月	二日、蘆原離宮に行幸。
天平十二年 (七四〇)	二月	河内国知識寺の廬舍那仏を拝し、造頭を思い立つ。二三日、天皇と (元正) 太上天皇蘆原離宮に行幸。
天平十三年 (七四一)	三月	「遷都に擬して」恭仁宮行幸。
天平十四年 (七四二)	二月	「大養徳恭仁大宮」と号す。
天平十五年 (七四三)	十月	大仏造頭の詔。甲賀寺の寺地を開く。行基の協力。造離宮司任命、紫香樂宮の造営開始。
天平十六年 (七四四)	一月	聖武天皇、紫香樂宮行幸。
天平十七年 (七四五)	一月	元正太上天皇、紫香樂宮行幸。
天平十八年 (七四六)	九月	大仏鑄造を金鐘寺の地に再開。
天平十九年 (七四七)	九月	大仏鑄造開始。
天平二十年 (七四八)	四月	東大寺行幸。黄金出現を大仏に告げ、自らを三宝の奴と称す。
天平二十一年 (七四九)	七月	阿倍皇太子即位 (孝謙天皇)。
天平二十二年 (七五〇)	四月	聖武太上天皇・光明皇太后・孝謙天皇行啓して大仏開眼供養。
天平二十三年 (七五一)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十四年 (七五二)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十五年 (七五三)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十六年 (七五四)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十七年 (七五五)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十八年 (七五六)	七月	難波宮を皇都とする。
天平二十九年 (七五七)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十年 (七五八)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十一年 (七五九)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十二年 (七六〇)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十三年 (七六一)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十四年 (七六二)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十五年 (七六三)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十六年 (七六四)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十七年 (七六五)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十八年 (七六六)	七月	難波宮を皇都とする。
天平三十九年 (七六七)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十年 (七六八)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十一年 (七六九)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十二年 (七七〇)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十三年 (七七一)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十四年 (七七二)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十五年 (七七三)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十六年 (七七四)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十七年 (七七五)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十八年 (七七六)	七月	難波宮を皇都とする。
天平四十九年 (七七七)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十年 (七七八)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十一年 (七七九)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十二年 (七八〇)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十三年 (七八一)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十四年 (七八二)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十五年 (七八三)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十六年 (七八四)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十七年 (七八五)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十八年 (七八六)	七月	難波宮を皇都とする。
天平五十九年 (七八七)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十年 (七八八)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十一年 (七八九)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十二年 (七九〇)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十三年 (七九一)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十四年 (七九二)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十五年 (七九三)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十六年 (七九四)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十七年 (七九五)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十八年 (七九六)	七月	難波宮を皇都とする。
天平六十九年 (七九七)	七月	難波宮を皇都とする。
天平七十年 (七九八)	七月	難波宮を皇都とする。
天平七十一年 (七九九)	七月	難波宮を皇都とする。
天平七十二年 (八〇〇)	七月	難波宮を皇都とする。



瀧波貞子『帝王聖武—天平の動き皇帝』より



**KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER**

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189